

本編の一部を体験版用に編集したファイルになります。

力なく玄関のドアを開ける。

そこで見つけた一つの箱。大手運用会社の配送シールが貼られた、変哲もない段ボール箱だった。

感じるのは強烈な違和感。一瞬、放浪中の爺さんが帰ってきて荷物を受け取ったのかと考えるが、家の中に気配はない。

配送シールを見ると、宛名は「高藤 悠一」つまり俺宛ての荷物だ。送り主の住所はない、記載があるのは名前欄のみ。そこには「高藤 加奈」、姉の名前が書かれていた。

背筋がゾクリとし、頬に一筋の汗が流れる。

特別にセキュリティのある家ではないが、戸締まりはしてあった。侵入の形跡もない。家に入れるのは、鍵を持った親族のみ。

「姉さんが、帰ってきた…？」

いいや、だとしても俺宛の荷物を玄関先に置いて、本人がどこかに行くだろうか。

そもそも、宅配便の配送シールなど貼る必要がない。

俺は、嫌な予感を感じながら慎重に箱を開ける。

中に入っていたのは、大量のBD。市販の映画やアニメのものではない。自宅でデータ保存

をするためのものだろう、ケースには表面に何も書かれていない円盤と、B Dの内容を書いた
めの白い紙が一枚入っていた。

B Dは上から順に、1，2，3，4と順番が書かれており、全部で100枚以上ありそう
だ。

どれも高容量のディスクで、テレビに繋いだ安物のブルーレイレコーダーでは再生できず、
やむ無くパソコンの前へと向かう。

嫌な予感に更に強まり、心臓がどくどくと騒ぎ出す。

震える指を抑えながら1枚目のディスクを取り出し、ドライブにセットする。

自動的に、動画の再生が始まった。

動画は、暗い地下室のようなところを映していた。

すぐに画面が明るくなり、二人の少女の姿が映る。

「佐奈……、加奈……！！？」

画面中央に、天井から伸びる鎖に両手を縛られ吊るされた佐奈。その奥には、金属と木でできた木馬に乗せられた加奈の姿が映る。

妹の佐奈は、一見するとボディスーツのような格好をさせられていた。肌にピッチリと吸いつく紺色ワンピースタイプのスクール水着のような服に、両手両足を覆う長い同色の手袋とソックスを着せられている。ほぼ全身を紺色で包まれ身体の線が丸見えだ。

そんな卑猥な格好で、両足首の間に枷がはめられ、その間を鉄の棒を通して足を開いたまま閉じられなくされている。目隠しをされ周りがどうなっているのかわからずに怯えていた。吊られているだけでも相当辛いのだろう、きめ細やかな10代の肌に、薄っすらと汗が滲み、ライトに照らされ艶かしく光っている。

ぴっちりとしたスーツは身体の線を隠す役割を果たしておらず、陰唇の形は丸見えで、まるで紺色の肌のように乳首の形までよく分かる。元々小柄な割には豊満だった双房は、俺がかつてベッドで見たものよりも幾分大きく育っているように見える。昔俺が可愛いと褒めて以来、

いつもしていたツイントールは健在、それが今は異様に懐かしく感じる。

画面の中で佐奈は、全体重のかかる両腕を揺さぶり、苦しさで恐怖の入り混じった表情をカメラに向けている。薄暗い部屋で蝋燭のような淡い光に照らされた彼女の姿は、最高のSM素材に見える。その手の趣味がない俺ですら、興奮を抑えきれない。だが今の佐奈には、自身の淫らな格好を恥じらう余裕など無いように見える。

「いったい…何が…」

カメラが切り替わり、今度は奥の加奈の姿を捉える。

姉の加奈は大事なところが丸見えなボンテージ姿。佐奈に比べて控えめな両胸や、子宮のある辺りもハート型に切り抜かれ、強調された男を誘うための淫乱衣装だ。それ以外の装飾もSMプレイのような激しいモノ。首輪を付けられ口にはボールギャグをはめられ、両腕は後ろ手にまとめて縛られている。さらに両方の乳首に穴が開けられ、ピアスを取り付けられていた。興奮しているのだろうか、姉の乳首は勃起しているようにも見える。いや、乳首が大きくなっているのは間違いないのだが、本当に勃起しているかはわからない。なにしろ、乳首が支えるには大きすぎる重りが、両胸にぶら下げられているのだ。

きれいな球体をした重りは重力に引かれて加奈の胸を痛めつけ、無理やり引き伸ばしている。加奈が少し悶えただけで揺れる二つの重りは、お互いにぶつかり合い物理の実験でよくある振り子のようにカチカチ音を立てている。



カメラが、ピアスから滲むうす黒い液体の瞬きを捉えた。よく見れば、重りに責め続けられているピアスの端から、滲むように血が染み出しており、ポタ…ポタ…と時折木馬の背に滴り落ちている。

両足には乳首のそれとは比べ物にならないくらい巨大な鉄塊がそれぞれ付けられていた。重り二つで加奈一人の体重分くらいの重さがありそうだ。それが地面につくことなく、縛り付けられた加奈の足の下で揺れている。

ポールギヤグのせいで呻くような声しか出せない加奈は、口の端から涎を垂らし、小刻みに震えている。

肩の少し下まで届くくらいのセミロングの髪が、それに合わせて揺れていた。

『ふうう…：…ふうう…：…ふむう…：…』

よく見ると、縛られた両腕の先に太めのゴムのようなものが巻き付けられ、その反対側が木馬の端に結ばれていた。勝手に木馬から降りられないように、動きを制限する仕掛けだろう。そんなことを考える自分が、冷静なのか、分からない。ただただ思考が高速で空回りしているのを感じる。

木馬は、股を割く拷問用の三角木馬とは違う。

加奈が跨る部分にはちょうど彼女の股間を押し付けられるだけの幅があり、加奈はペタリと足の付根を密着させるように座らされている。

加奈の股間の周りがアップになる。肉の盛り上がり方がおかしい。まるで、膣穴に巨大な何かを挿れられているかのようだ。

カメラが切り替わり、今度は加奈の背後、尻がアップになった。

木馬から少し浮き上がったそこ、彼女の尻と木馬の間にあるわずかに空いた隙間に、異様なものが映っている。

「バイブ：なの、か」

500ミリペットボトルよりも大きそうな、極太のバイブだ。

とてもではないが人間の、年端も行かぬ少女の排泄穴に挿れるものではない。

俺は、姉を正面から見たときの、異様な肉の盛り上がりの理由にも気づく。

「まさか、前にも：！！」

その疑問は、すぐに確信へと変わる。

木馬が小刻みに揺れ始め、加奈が苦しげな声を漏らす。

『うむううう：：：！うぐううう：：：、うぎ、ううううう：：：！！』

乳首ピアスの重りが小さく上下運動をする。勃起し丸見えの両胸を撈られ、それでまた姉は切なげな声をあげていく。

『むううう：：：んむっ、うううううう：：：！！あ：：：むううううう：：：』

木馬の揺れは次第に大きくなり、加奈の体内を強烈に刺激し始める。

初めはバイブの振動音が聞こえてくる程度だったが、その音はどんどん強まり、加奈の下腹部が振動でダブって見え始める。

『ふおおおおお！うぐぐぐ、ううむううう！んんうううー！』

ついには振動などというレベルを超え、上下運動に加えてブランコを揺らすように木馬が最後に波打ち初めた。加奈の体もそれに沿って前後に動き始める。

『んむううううー！むむっ、うううう、やむ：：んっ、くううううッ！』

やめてくれ、と言いかけたように見えた。姉が懇願するような言葉を吐きかけ、寸前で堪えたその直後だった。

これまでとは比較にならないほど強烈な上下運動が起こり、加奈の股間が木馬から数センチ浮き上がる。そのせいで、尻穴同様の凶悪バイブが膣穴をピストンするのが見えた。

『おおおおお：：！！んおおおおお：：！！んうおおおおお！！』

ハート型に切り抜かれたへそのあたりが、体内の異物によって盛り上がる。

加奈は頭を振り、両目を瞑りながら必死に耐えている。

挿れられているだけでも失神ものの極太バイブで、膣穴と直腸をぐちゃぐちゃにシェイクされるのだ、その苦痛は男の俺には想像すらできない。

姉の動きは、パンパンと男の腰の上で軽いピストンをしているような動きに見えるのに、その股間から響く音はそんなに軽いものではなかった。グチュグチュと肉が広がる音に加えて、

ゴキゴキと骨がこすれ合い、ぶつかるような音が混じっている。

加奈の股間からは薄っすらと血が滲んでいた。どちらの穴が裂けたのかはわからない、だが加奈の身体が壊されていつている事実だけははっきりと分かる。

それでも更に、木馬の動きは強烈になっていく。

それ以上はだめだ、止めてくれと願っても動画の中の木馬は止まらない。

ついにはドスン、と突き上げるような強烈な上下運動が起こり加奈の身体が宙に浮く。

『おほっ！？』

やけに響く間の抜けた声をして、ずちゃりと肉が擦れる音がする。

その時初めて、加奈の体内に収められていた凶器の全容が明らかになった。

全長30センチ近くありそうなそれは、尻穴の物の方が若干長い。どちらも肉に引っかかる凶悪そうな棘が無数についている。

2本のパイプがちょうど抜けるくらいの高さに跳ね上げられた加奈の身体は、最高到達点で一瞬停止した後、重力に引かれ無慈悲な落下を開始する。

——ぐちゅぐちゅ、ドゴッ！

1秒もしないうちに、肉を裂く音と股間が木馬に打ち付けられる音が続けて響く。

『ンおおおおおおお——————————————————————ッ！！』

上半身を折れそうなほどのけぞらせ、加奈が叫ぶ。

ピンク色をした加奈のキツそうな二穴を、極太バイブはバターでも割くかのようになく。両足に着けられた鉄塊が相当な重量なのだろう。落下の勢いはほとんどおさまることなく、股間を木馬に叩きつけられ肉の叩かれる音があたりに響く。両胸の重りも、木馬の跳ね上げに少し遅れて、加奈の控えめな両胸を上へ下へと勢いよく引っ張る。

あまりの痛みに悶絶し、鳴き叫ぶ加奈。

だが木馬は彼女に回復する間を与えず、次の上下運動を引き起こす。

『おほうっ！？』

加奈は尻穴と膣から長く極太のバイブが一息に抜かれ、汚い喘ぎ声を漏らす。

後ろに倒れていた首が衝撃で起き上がり、瞳孔の開いた加奈の瞳をカメラが捕らえた。

『んおおおおおおお——！！！！』

再びのピストンに、目を見開いて悲鳴を上げる加奈。

『ふぎいっ！！』

その瞳が閉じきるよりも先に、次のピストン運動が行われる。

『うぎぎぎおお——！！！！』

彼女が出し入れされているバイブは、太く長いだけではない。

表面にはいくつもの棘があり、一突きごとに体内の肉を裂いていく。

『おっへえええええ！！』

バイブが引き抜かれた時に、一瞬だけこれまで見たこともない姉の蕩け顔が見えた。

『ぎぎぎぎぎぎ：あああああああああ————！！！！』

しかしそれもすぐに、苦痛に満ちた絶望顔に変わる。

『ぐぎいいい！！』

『んごおおおおおおお————！！！！』

性感帯へのバイブピストン、やっていることはレイプ、性行為のように思えるが、これはそんな生易しいものではない。

『あへえええッ！！？』

『おっっ、ぎぎぎぎぎぎよあああああ————！！！！』

挿れられているのは女を壊すための凶悪バイブ、どれだけセックスに慣れたビッチだろう

と、簡単に体内に入れられるものではない。

凶器であるバイブはピストンだけでなく、何重にもダブって見えるほど強烈な振動を伴っている。

ただ挿れられているだけでも気絶しかねないほどの激痛を伴うのに、少女の身体がこんな極悪な責めで壊れないはずがない。

『ぎへえええっ！！』

『ジぎいいいいいい————！！！！』

ッ！！』

絶叫、後に失神。

加奈は完全に白目を剥いて気絶していた。

ボールギャグの間からこぼこぼと白い泡が溢れ出る。

この拷問では、膣穴と尻穴、その奥にある子宮や内蔵で落下のエネルギーを受け止めさせられる。受け止めきれなかったエネルギーは股間の肉と骨がその代償を払わされるのだ。

まるでプロレスラーに人体急所を蹴り上げられたようなダメージが休むこと無く与えられ、股間よりも先に加奈の脳神経が耐えきれなくなった。

膣穴と尻穴はギチギチに締め付けながらも、あそこは制御が効かなく緩んだのか、染み出すように黄色い液体が木馬を伝って流れていく。

俺と同じく、武人の爺さんに死ぬほど厳しい修行で鍛えられた加奈ねえですら耐えきれない拷問。

だが流星に気絶した彼女を責めることまではしないのか、木馬の動作が止まっていた。

俺は無意識のうちに、ふう…と息を吐き、緊張のあまり止まっていた呼吸を再開した。

が、次の瞬間加奈の身体が大きく震える。それも何度も、心肺が停止した患者が電気ショックを与えられているかのように何度も、何度も震え、股間のパイプと木馬の金属部分との間に青白い紫電も走る。

「……ん……ンンッ、ン……あッ！？ぎぎぎぎぎぎ、ひぎいいいいいいいいいいいい！！？」

激しい痙攣の後、絶叫を上げて加奈の意識が戻る。

「いいいいいいいいいいいい！！！！ああああああああああ………
ッ！！！！」

意識が戻ってからも、しばらく血を吐くような悲鳴が加奈の口から上がり続ける。

加奈の股間から薄っすらと煙のようなものが上がっていた。

「膣と、尻のバイブから、電撃……を！？」

まさかと思う凶悪過ぎる方法で無理やり意識を取り戻された彼女を、再び木馬のピストンが襲う。

「ふぎっ！！？」

加奈の目は未だ焦点が合っていない。だが両足の重りと腕の拘束で無理やり体制を維持されながら、無理やり宙に浮かされバイブを抜き差し、ゴリつと骨がなる音を響かせ股間を木馬の金属部分に打ち付けられる。

「おおおおおおお————！！！！」

そこからまた、機械的に木馬のピストンが続いていく。

股間を襲う激痛に、加奈は悲痛な叫びを上げ続ける。



彼女が失神しない限り、木馬のピストンは止まらない。

「ふぎいいっ！！」

「ンおおおおおお——————————ッ！！」

「あぎいいいっ！！」

「ひぎよおおおお——————————ッ！！」

「おほおっ！！」

「——————————ッ！ンゾおおおお——————————ッ！！」

「あばいいいっ！！」

「おおおおおお——————————ッ！！」

「いばいいいっ！！」

「————————————————————————————————ッ！！」

「………ああっ」

意識が飛んだら、二穴パイプからの電気ショック。

——バチバチバチバチッ！

「………あ、………つ、………ッ！！………ぐぎっ、ぎいいいい

いいいいいい！！ひぎいいいいいい！！ああああ——————————

——ッ！ああああ——ッ！あああああッ！』

気絶した罰だと言わんばかりに、意識を取り戻したあともしばらく電撃を浴びせられ、絶叫をあげさせられる。

電撃で焼かれた肉の匂いが画面越しに漂ってきそうなほどの臨場感。

加奈の周りには誰もいない。ただ延々と泣き叫ぶ様子をカメラで取られ続けている。

俺は気づいてしまった、これは加奈に何かを自白させたり、要求をのませたりするための拷問ではない。

これは処刑だ。

1ピストンごとに、加奈が壊されていくのが如実にわかる。

『ああッ！』

『あんぎばいばいばいばいばい——』

『ぐげええッ！』

『ぎぎぎばいばいばいばい——』

『がはああッ！』

『うぼおおおッ、ぎああああああ——』

『んほおおッ！』

『のああッ、ふつぎばいばいばいばい——』

『んぎぎやあおおおおおおおおお——————————————————————』

その後も、何事もなかったかのように姉を壊すピストン運動は続けられていった。

そこでカメラが突如切り替わり、もう一人の少女、妹の佐奈の姿が映る。

彼女の後ろ側では、木馬に股間を壊され続ける姉の姿が遠巻きに映り、悲鳴が聞こえ続けている。

佐奈は背後で姉が痛めつけられている間、必死に唇を噛み締め声を出さずにたえていた。

画面越しに動画を見ている俺ですら止めてくれと懇願したのだ、普段の心優しい佐奈ならば姉の身を案じ、声を上げないはずがない。

不自然なほどの沈黙と、今にも泣き出しそうな妹の顔。

「なんて、ことだ……」

その意味を理解し絶望に満ちた声が、俺の口から漏れ出た。

姉を案じる言葉を出してはいけない、泣きたくても泣いてはいけない、必死に堪える様子から彼女たちが動画の撮影者に完全に支配されていることを感じ取る。

よく見れば、佐奈の首には力を込めて絞められた後が薄っすらと残っている。絞められた時間のごくわずか、時間もあまり経っていない。佐奈は俺や姉と違って、なんの訓練も受けていない普通の女の子だ。もし佐奈が目隠しをされて拘束されたこの格好で首を絞められたのなら、それはものすごい恐怖だっただろう。



それを思うだけでも俺の心が張り裂けそうなほど。

だが、最愛の妹に対する責めはまだ始まってすらいない。

「——ッ!? おい、やめろ、くそっ!!! やめろおお!!!」

案の定、彼女にも魔の手が迫る。

仮面を着けた男が佐奈の背後に立った。

その手には、蛇のように長く、太い鞭が握られていた。

そんなものを見れば、このあとの展開は嫌でも分かる。

男が鞭を振りかぶると、カメラでは捉えきれない速さでビュンッ、と佐奈の背中を叩いた。

『きゃああああッ!!!?』

佐奈の口から悲鳴が上がる。

男の鞭打ちが1度で終わるはずはなく、立て続けに振るわれ、佐奈の口を何度も無理やり開かせる。

——バチーン! バチーン! バチーン!

『いやあああああ! きゃあああああ!!! 痛い痛い!!! いぎっ、いたいいたい
いいいい!!!』

明らかに、プレイ用ではなく本物の拷問、処刑用の鞭だ。彼女が着せられていたボディ
ッが一撃ごとに簡単に破られていく。

『あぐうううううう！！いいいいいいいいいい！！ひぎいいいいいいいいいい！！あぎいいいいいいいいいい！！ふぎいいいいいいいいいいいい！！んぎいいいいいいいいいいいいー！！ー！！ー！！ー！！ツ！！はあ
っ、はあっ、はあ：はあっ：：！！』

痛みに耐えかね、珠のような汗がいくつも浮かぶ。

鞭が止み、佐奈はハアハアと荒い呼吸を繰り返す。

佐奈の背中をカメラが映す。そこには無残な鞭後が刻まれ、着せられたスーツは布切れのよ
うに破かれていた。

一撃一撃が、本物の処刑・拷問用のそれだ。

佐奈を責める男も、この動画を見ている連中も、目的は佐奈の苦しむ姿だろう。

鞭を打つ男は、まだまだ軽いジャブといったような様子だが、それでも佐奈にとっては悲鳴
をあげずに耐えられる痛みではない。

彼女の前方に、もう一人男が現れた。そいつは、ビュンビュンと大きな音が立つように佐奈
の足元めがけて数度鞭を振るう。

そのたびに、佐奈は小動物のように身体を震わせ、恐怖に怯える。

『い：いや：やら、やめて：お願い、します：：ひっ、ああ、やら：やらああ：：』

男たちが前後から佐奈の足元を鞭で叩く度に、ビクビクと震えて悲鳴を上げる。

そんな彼女の懇願も虚しく、今度は前方の男の鞭も佐奈を打つ。

それと同時に、後ろの男も鞭打ちを再開した。

『ひいいいいいいいい！！いやあああああ！！あああああ！！やめっ、ぎゃああああ！！ひぎゃあああああ！！！』

妹の身体を、幾筋もの鞭が叩いていく。

後ろからは背中を、前側からは手足を中心に叩かれ、全身を覆っていた紺色の衣装が破かれていく。

『いたいいいいい！！ひぎいいいい！！あぎいいいい！！あぎひいいいい！！あぶあぶッ！！』

佐奈を覆う生地が破かれ、紺色と肌色、そしてその中に交じる鮮血の赤が異様なほど艶めかしい。

俺の知らない妹の姿。

画面の中で泣く彼女に、怒りと絶望、憤り、様々な負の感情に加えて興奮までもが混じり頭の中が混沌としてくる。

胃の中身がこみ上げてきそうになるのを堪えて、悲鳴を上げ続ける最愛の妹を映す画面を見ると、一時男たちの鞭が止まっていた。

編集された動画には、前後二方向からの画像が同時に映っていた。手足の衣装はほとんど剥がれ、幾筋もの傷跡から血が滴っている。

背後は特に背中を重点的に叩かれており、×字形に幾筋もの鞭打ち痕が残されていた。前方からは性的な部分、胸や股間は無事な様子が見える。

それはつまり、次はそこが狙われるということに他ならない。

『あああ………あば………いいいいいい、痛い、痛いよお、助けて……悠………にい』

くぐもった声だがはつきりと分かる。佐奈に名前を呼ばれ、俺はハツとした。

瞳から大量の涙を流し、鼻水と涎も垂らした絶望的な表情をした妹が俺に助けを求めている。

「佐奈……、佐奈ッ！！」

画面に食いつくように、妹の名を呼ぶ。

それに呼応するかのように、二人の男が動き出した。

『ひいいいっ………！！ああ………う………ああ………ごめん、なさい、やめ、て………おねがい、やめー』

まるで、行為の最中に他の男の名前を出されたように、男たちから怒気が生じる。

「くそっ、やめろおお！！」

佐奈を壊す、明確な意思が感じられる二筋の鞭が、彼女の尻と股間を的確に穿つ。

『あぎいいいいいいいい！！ばばいいいい！！おまた、やめ………ぎいいいいいいいいいい！！！！』

打ち始めたら止まらない。

幾筋もの痕を佐奈の身体に容赦なく刻んでいく。

『ぎいいいいいいいいいいいいいい！！ひいいいいいい！！がああッ、ぎひいいいいぎぎぎぎぎいいいいいい！！おおおおおおお！！』

驚くほどの的確な鞭打ち。佐奈の陰唇やクリトリスが何度も何度も叩かれていく。

尻の方はまんべんなく、まさに滅多打ち、残った衣装の紺色部分が鞭の筋に赤黒く塗り替えられていく。

『おおおおおッ！！！！おおおおぎいいいい！！！！ぎぎいいいい！！！！ばばばばばッ！！ばばばばばッ！！！！』

佐奈の声も、どンドンと汚い呻き声へと変わっていく。

まるで獣だ。

俺の佐奈が……壊される。

幾度も叩かれ、形がよく同年代の子よりも少し大きくて、彼女のコンプレックスだった尻の肉片が宙を飛んでいく。

すぐに死ぬほどの傷ではない、だがいつ痛みでショック死してもおかしくない、そんな状況。

こんな拷問に、妹がそう長く耐えられるはずがない。

そう思う俺の想像以上に、佐奈は耐えていた。

姉の加奈もそうだったが、彼女たちがこんな凶悪な拷問にいつまでも意識を保っていることが不思議だった。

頭がぐちゃぐちゃで思考が空回りしていた俺は、その疑問を頭の片隅で捉えつつもそれ以上の考えが回らない。

そんなことを思う間に、最愛の妹が壊されていく。

『あああ……ああ……あああ……ッ！！』

ついに、佐奈の限界が来たのかガクガクと痙攣して口から泡を吐き、鞭に衣装が剥ぎ取られ丸見えになった股間から小便を漏らしながら失神する。

妹の粗相が終わるまで、男たちの鞭打ちが止み、様々な角度から彼女の股間が映し出される。

ピクピクと少し穴が開き気味になった股間から垂れるモノには、薄っすらと粘り気のある液体も混じっていた。まさか感じているのか？いいや、きっと単なる生理的な反応に違いない。何度も叩かれ、肌は赤く腫れ上がり、場所によっては黒くなりかけているほどの重症だ。これで気持ちよくなるとなるわけがない。

佐奈がまだ生きているだけでも奇跡だろう。痙攣の仕方をみるに舌を噛み切っているもおかしい。妹はこんなことで喜ぶ変態じゃあない。

そんなことより、ここまで責めたんだ、これでもう終わりだろうと淡い希望が頭に浮かぶ。そんな馬鹿な自分をぶん殴りたくなる光景が、動画の続きには映し出されていた。

鞭をおいた男二人が、人が一人入れそうなほど大きなポリバケツにいっぱいの水を用意する。そこに、袋に入った大量の白い粉を投入、1リットル近く入りそうな大きな柄杓でかき混ぜていく。

粉の袋はスーパーでよく見るもの、正体などすぐに分かる。

「塩：だと、それも、そんな量を：」

そしてその効能も。

「くそっ、くそがあああ！！」

この拷問は一体いつ終わるのだ、終わりの見えない地獄に、俺は動画の再生バーを見やる。

「まだ：ほとんど動いていない：：！！？」

1割は愚か、数%程度しか動画の再生は終わっていない。

この時に、動画の総再生時間を見たのかどうか、それすらもう俺の記憶には残っていないかった。

高濃度塩水の用意が終わると、続いて佐奈の口にボールギャグが嵌められた。

拘束度合いが増して卑猥さが増す、と同時に口を噛み締め過ぎたり、舌を噛んだりさせないための対策でもあるだろう。

少なくともこれで、佐奈が舌を嚙んで死ぬことはない。

そうすると、男たちは意識を失った佐奈に容赦なく高濃度の塩水をぶっかけていく。

柄杓で掬って、何度も、何度も。

顔面にも冷たい塩水をかけられ、佐奈が意識を取り戻す。

『うあ……ああ……ああ……ぎッ！？』

意識を取り戻した彼女が、ぼんやりとした様子で小さく呻いていられたのはほんの一瞬だった。

塩が染み込んだ全身の傷から燃えるような痛みを感じた佐奈は、陸に打ち上げられた魚のようにビクビクと震え、絶叫した。

『ぎおおおおおー！ー！ー！ー！ー！ー！あおおおおあッ！あういいいいいッ！！』

アヴィイイイイイッ！！おおおおッ、おおおおあッ！！ズズズズズズ！！』

ふと、佐奈の声を聞き、仮面の男が笑ったように見えた。

錯覚だったのだと思う、仮面越しに表情が見えるはずもない。

俺がそんなことを考えている間に、男二人の鞭打ちが再開される。

『ぎいいいいいいいいい！！あああああッ！！あああッ！！』

容赦のない乱打。

前側を叩いていた男が、ついに佐奈の身体で最も目立つところ、〇カップ相当にまで育った

叩き甲斐のある歳不相応な大ききの両胸にもその毒牙を伸ばす。

『ひぎゃあああッ！あぶいいいいいい！！おおッ、ひいいいい！！おっあいいい、ぎゃあああああ！あがあああッ！！ばギレ、ひぎいいいいいいいいいい！！あづいいいいいいいい！！おおあ————ッ！』

そこからただただ地獄が続く。

佐奈が着ていた衣装などつくの昔に布切れとなり、全裸同然にひん剥かれ、叩かれた鞭痕すらわからないほど皮膚をポロポロに薙がれ続ける。

画面の中で佐奈の乳首が裂けて飛び散り、カメラの一つに張り付いた。

「あっ、あああ…：うそ、だろ…：佐奈の、乳首…ああッ！！あああッ！！」

俺はその乳首の残骸から目が離せない。何者かが、カメラのレンズを拭き取るとき、ゴミのように扱われる佐奈の乳首の残骸を見て俺は絶叫してしまった。

だが動画では俺の声などは比べ物にならないほどの、佐奈の悲痛な叫びが録音されている。

『おおおおッ！！おおおおあ————』

意識を失うことも、何度あったのか数えることすら難しい。

そのたびに男たちは塩水をぶっかけ、佐奈に全身が燃えたぎるような痛みを与えて叩き起す。

その不思議な液体は、加奈にも飲まされていた。

命を繋がれ、二人の姉妹の地獄が続いていく。

このときの俺の精神では、動画の全てを見ることができずに、途中からスキップしていくつかのシーンだけを見ていった。

その動画には、ひたすらに加奈と佐奈が拷問される様子だけが映っていた。あるシーンでは加奈がピックアップされ、別のシーンでは佐奈にカメラが映る。

複数のカメラ視点を交えた動画の編集はされているが、全て経過した時間通りに録画されている。どのシーンをとっても、編集による繰り返しはない。

ただただひたすら、加奈と佐奈は罵られ続けていた。

動画の最後数分を再生すると、全身に鞭を浴び、肌色が消えどす黒い血が身体の至るところにこびりついた佐奈と、ピアスごと引きちぎれた乳首からポタポタと滴る血も固まり、股が裂け両足を玩具みたいにぶらんぶらんさせながら、骨も筋肉も内蔵も壊され胸の下まで入り込んだ極太バイブの形が肉の上から一見したただけでわかり、今にも腹を突き破りそうになっている加奈が放置されていた。

『お………ああ………う………あ………が………ぴ………お』

『………ピギッ！………あ………あ………んぴ………お………』

…い…：…：…あ…：…：…：…：…」

どちらも、かろうじて生きているようだ。

だが二人共白目をむいて、今にも死にそうな様子。時折燃え尽きる最後のろうそくのように痙攣を行い、まだ生きていと主張する。

このときの俺には、そこに至るまでの道程を見ることは耐えられなかった。しかし、ここまですべて延々と地獄のような拷問が続いていたのだろうことは容易に想像がついた。

ただ、二人共まだ死んでいない、生きて拷問が終わった、そのことを確認できて辛うじてまだ希望が残る。

ふと画面下の再生時間が目に入った。

見なければよかった、このとき本当に後悔したことを、生涯消えることのない記憶として覚えてい

再生時間 2 5 .. 5 3 .. 0 6 : : 0 7 : : 0 8 。

「うあ…：あああ、あああッ！ああああああああ！！！！」

湧き上がる嘔吐、それに反していきり立つ肉棒。

『あぁっ…：うぐ…：あ…：…：いいい…：…』

画面から響く壊れた佐奈の呻き声に、俺の一物は濃厚な白濁液を吹き出していた。

これ以上見ていられない。

動画を消そうと手を伸ばしたその間に、画面の中で動きがあった。

怪しげな白いローブを着た、男か女かもわからない仮面の人物が数人、佐奈と加奈の拘束を開放し床に横たえていた。

全身血だらけの佐奈は当然、内蔵をぐちよぐちよに壊された加奈も股間からバイブが引き抜かれダラダラと致死量に近そうな量の血液を垂れ流していた。

トドメをさすつもりなのか、そう思った次の瞬間、二人の下、床から強烈な光が発生した。カメラの光感度の調整がつかず、画面が真っ白に染まる。

しばらくして光がおさまりかけるとき、二人を寝かせた床に不思議で複雑怪奇な魔法陣が見えた。

そして完全に光がおさまると、そこには無傷の状態に戻った二人の姿。小さく上下する胸に、安らかな呼吸を感じる。

仰向けに寝かされたままなので背中は見えないが、全裸状態なのだ、元通りきれいに回復していることは十分わかる。

まるで魔法だ。

何がなんだかわからず呆然としつつも、その間も動画は流れ続ける。

そして画面の右下に目立つように、ある一文が映し出された。

To Be Continued : : !

続く、そう書かれていて、俺はその時見ているBDがまだ1枚目であることに気づいた。

狂ったように荷物をかき分け、2枚目のディスクを取り出す。

その間に、100枚近いディスクの山を崩してしまおうが、そんなことを気にする余裕もない。

祈るような思いで動画の再生を初める。

そこには、一枚目の動画の冒頭同様に、傷一つ無いきれいな体で拘束された加奈と佐奈の姿。

佐奈は彼女の背丈以上ある巨大な椅子に手足を縛り付けられていた。動画が進むと、仮面の男たちが佐奈の身体に、無数の電気針を突き刺し電気パットを取り付けていく。

一方、天井から逆さまに鎖で吊るされ、めいっばい股を開いて拘束されていた加奈のそばには、赤白く輝くマグマのような灼熱の鉄塊が用意される。

一枚目のBDとはまるで違う拷問具。

二人を映すカメラが動き、上から見下ろすような角度を取る。

拘束された二人の足元には、少し前に見た覚えのある魔法陣。

「再生、時間は : : : ! !」

動画の総再生時間を確認する。

そこには、絶望的な数字が表示されていた。

真っ白なこの部屋に囚われてからどれだけの時間が立っただろうか。

窓も時計もない部屋では、今が昼か夜かもわからない。

何度も薬で眠らされ、その間に何をされたかもわからない。

全ては私の失敗。

私は父親の陰謀に、キレイにハマった敗北者。

あれは勝ち目のある勝負ではなかった、かといって気がついたときにはもう勝負から逃げられる状況でもなかった。用意周到に用意された罠。勝負を受けさせられる事になった時点で、こうなることは確定していたのだ。

敗北の代償は私自身と、妹の佐奈。

勝負の対価として賭けていたもの：いや、賭けさせられていたものはそのまま私の負債となり、私達姉妹二人の身体で返さなければならなくなった。

言い換えれば、私達二人は父親に売られたようなものだ。

私達を捕らえた組織は、裏社会の巨大組織、一般社会では空想上のものだと思われる魔法技術を管理し、科学技術でも先進国を遥かに凌ぐ。もし彼らと取引ができれば、常識では実現不可能なことですら可能としてくれる。その一方で、対価への支払には一切の情け容赦がな

い。負債者が若い女の場合、その者の意思も人権も関係なく、身体を使って支払わされる。その組織では、負債を返すために捕らえた女を使って、世界中の大金持ちの好事家、その中でも選りすぐりの変態達を相手にシヨールを開く。そこで見世物にされ、それによって稼いだ金で負債を返すという仕組みだ。当然表の人間達に向けたシヨールではないため、ストリップシヨールやアダルトビデオのような生易しい見世物ではなく、レイプや拷問、処刑に近い人間を壊すシヨールがゲーム感覚で行われる。

そこで動く金額は莫大だが、私達の場合はそれでも完済までに何年かかるのかもわからない。それまでの間、私達姉妹に一切の自由はない。

もうこうなっては逃れようがない。妹の佐奈にとってはとぼちりとしか言いようがない。あえて彼女がここにいる理由をあげれば、同じ父親を持ったこと。本当に、妹には申し訳が立たない。

だからといって相手は一国家ですら対等には渡り合えないほどの巨大組織、この身一つなどでは抗いようもなかった。妹と共に逃げようなど、どうあがいても不可能だ。

実家で弟と暮らしているはずの妹とは、敗北の翌日に引き合わされた。

拉致されてきて何もわからない状態の妹とは、ほとんど話もできずにそれぞれ別の部屋に収容されてしまった。

どうしてこうなったのか、後悔だけが募る。

私達を捕まえた連中の残虐さは知っている、妹が一般人だろうが容赦など無い。死んだほうがマシだと思おうような責め苦を、これから幾度となく繰り返される。

それでも死ぬことは許されない、例え死ねても開放はされない。比喻ではなく、おそらく死んだとしても生き返らせるくらいのことではできるだろう。

唯一の希望は、弟の悠一だ。

彼が助けに来てくれる以外に、私達がここから脱出する方法はない。

弟は私よりも賢く、強く、才能がある。

きっと私のような失敗もしない。

だが、彼はまだこの裏の世界を知らない。

普通に私達を探していたら、一生かかってもたどり着けないだろう。

なんとかして弟に連絡を取りたくても、囚われの身では何もできない、完全に詰みだった。



それからまたしばらくして、私を拘束している部屋に男が二人入ってきた。

私達を使った最初のショーが決まったという。

その様子は録画され、好きもの道楽富豪達の間で売りさばかれる。

自分や妹の痴態や拷問の様子を他人に見られることは耐え難いことではあるが、考えようによつてはこれは唯一の外部との接点だ。

いつかその動画が弟のもとにまで届けば、助けを求めるきっかけになるかもしれない。もはやそんな奇跡にすぎるしか無い私は、それでも最後まで諦めまいとこれから行われる残酷な所業に耐える決意を固める。

男が二人、私を部屋から連れ出す準備を始める。

初めに首輪をつけられ、着ていた服を全て脱がされた。

ここで抵抗することは不可能ではない。倒そうと思えばこの男二人も倒せるだろう。

だが、その先に脱出できる未来がない。こんな男たちの言いなりになるのは屈辱だが、今はおとなしくされるがままになるしかなかった。

卑猥なボンテージを着せられる。肌にピッチリと吸い付くボディスーツで、乳首と股間が丸見えだ。同じ素材のグローブとソックスも履かされた。

栄養剤のようなものを飲まされた後、口にボールギャグを嵌められる。

「むぐ… あえっ、ううう」

どうしても、無様な声が漏れる。

更には腋を見せつけるような格好で両手を後ろで組まされ、ゴムのような素材で両手をくく

られてしまった。

性行為のために作られたSM衣装。これで腰を落としたら、完全に男を誘うポーズだ。こんな格好、ある意味裸を見られるよりも恥ずかしい。それを見ず知らずの男にジロジロと見られるなんて。

男の顔が近づき、反射的に離れようと動いてしまうと、首輪に繋がれた鎖を引かれる。キスされそうな距離まで男に近づいてしまい、男の臭い息が顔にかかる。思わず抵抗したくなるがその選択肢は最初に捨てている。今の私は目を背けて耐えるしか無い。

鎖を持っているのは別の男が、私のむき出しの胸を揉みしだき始めた。

「あう：むううう：：」

妹に比べればポリウム感に劣るが、形は良いと思っっている私の胸が、つねるように強引に揉みしだかれる。

痛いと感じるとともに、なぜか気持ちが良いとも感じてしまう。

明らかに異常な身体の反応。

そうか、さつき飲まされたものの中に媚薬成分が含まれていたのか、と気づいた時にはもう私の身体は完全に発情して乳首は勃起状態になっていた。

「ふうううう：：むううううう：：」

淫らな身体の反応に羞恥心を感じるまもなく、私の勃起乳首へ一瞬の溜めもなく流れるよう

更にそこに、球状の重りが付けられた。

「ひぎ……いあっ、ああああッ！うううう……ああああッ！」

乳首、引っ張られ；重ッりいいい、揺れて、お互いにおつかってえ！？

見た目に反してかなりの重さがあり、胸が引っ張られタレ気味になる。

少し身を振っただけで、重りが動き、乳首が刺激され、激痛が走る。

これでも男たちの準備はまだ終わらない。

「あっ、あああッ！う……ぐうううっ、むああ、あううッ！」

今度は濡れ始めた膣穴に、無理やり男根の張形、バイブを突っ込まれる。

乳首ピアスでイッたせいで濡れ濡れの穴は、簡単に侵入物を受け入れてしまう。

尻の穴には大きめのローター。それも4つも挿れられた。

「おほおおう……んおお……ッ！あっ、あっ、ううう……」

我慢しようとしたが、薬のせいもあって気持ちよく悶えるような声が出てしまう。

ああ……こんなの、だめ……ッ、耐え、ろおお、私……！！

最後にそれらの電源が入れられ、準備が完了した。

バイブとローターを落とすな、と命じられた私は、ウイウイと動くそれらを尻穴と膣穴に力を入れて啜え込む。力を入れると穴の中で暴れるそれらから、すごく気持ちのいい刺激が襲ってくる。

かといって、少しでも締め付けないように媚肉の力を抜けば、バイブは振動でだんだんと体外へと勝手に出て行ってしまいう。口では言われなかったが、もし命令に背いてバイブかローターを落とすものなら、ひどい仕打ちに合わされることは間違いない。

ここでは私や妹に人権はない。

今は男たちの言うことを聞いて、とにかく耐えるしかないのだ。

その後部屋から連れ出された私は、一歩進むたびに揺れる重りに乳首を責められながら尻と膣の刺激に耐え、無理矢理首輪を引かれて処刑場まで歩かされるのだった。



「ううう…あうう…ううう、むぐうう…」

もうだめ、またバイブが抜けそう…。

思った以上に媚葉がきつく、私の股間はバイブの刺激で濡れ濡れトトロトトロになっていた。

激しく震えるバイブは、歩きたびにゴリゴリと肉を刺激し、私の膣穴からはヌルヌルとした愛液がこれでもかというほどに溢れていた。

そのせいで、今や膣の力だけでバイブを啜え続けるのは困難を極めた。

後少しで目的の部屋だという。

やっとここまでできた。

ここまでには私は4度、膣穴からバイブが抜け落ち、尻叩きに腹パン、股間の蹴り上げと男たちから激しい折檻に加えて何度もお仕置きと称した性拷問をされていた。さらにその都度、抜けたバイブよりも大きな物が充てがわれ、尻穴のローターも増量され、乳首に吊るされた重りもより重たいものへと交換された。

途中何度か抵抗したが「お前がやらなければその分を全部妹にやらせる」なんて言われたら、大人しく従うしか無い。

「ふうううーふうううーっ、ふひっ！？うあぁっ、んあぁあぁくくくっ！！」

あ：っ、だめ：また、抜けちゃう：：ッ！

ぽとん、と音を立ててバイブが床へと落ちていく。

後少しだったのに、耐えられなかった：：また、お仕置きをされてしまう。

本当に、思った以上にきついわ：：私が、非力な女の子みたいに男に嬲られて声をあげるだなんて：：。

でも、どんな状況だって簡単には屈さない、私は強い女だから：！普通の女の子とは違うの！プライドだってあるもの！

男たちの命令には従うけど、最低限だけ：絶対に媚を売ったり懇願したりなんてしないんだ

から！

そう強く思っていないと、お仕置きの最初でもう心が折れてしまいそうになる。

私を連行していた男たちが手始めにしてるのは、単純な暴力、殴る蹴るの乱暴。

「おぶうつ、おがつ、があああッ！あがつ、あひいひいっ、ぐぐ…あぐうううッ！！」

我慢のできない雌豚とか、淫乱変態便女とかひどい言葉を浴びせられ、自分がどういう扱いなのかをわからされる。

男たちのパンチは初心者丸出しで、私からしたらそこまで強くはない。とはいえ執拗に同じところを殴られ続ければダメージも蓄積していく。凹んだお腹がすぐには戻らなくなるほど腹パンが続けば、頭にクラクラと星が飛び始める。

「あひいひいっ！！あぎいひいひいっ！！うああああッ！！ひがああああッ！！」

私の反応が気に入らないと、今度はお尻を叩かれ、股間を蹴り上げられて、立っていられないほどの痛みで悶絶させられる。

股間はまずい、私は艶めかしい声を上げておしっこを我慢するように身悶えてしまう。だって…これは仕方ないじゃない、股間なんて鍛えられないもの。

腹パンとも合わさって、下腹部が辛くなる。腸がうねってお尻の中のローターもぐるぐる動いているような感じがする。

その感覚は間違いじゃあなかつたみたいで、少ししてぐりぐりぐりぐりとお腹が鳴って、排泄欲

求が湧き上がってくる。必死に耐えようとしても、殴られすぎて変になっていく私のお腹は堪え私がそんな風になると、察した男たちは殴るのをやめ、パイプを私の膣に挿れ直してくる。「おほおおおおーうううッ！！んほおお…おぐっ、ひひひひひひ！！むひっ、むひひひひひひ！！」

敏感な粘膜を抉るように、暴力的な勢いで突きこまれるパイプに身悶えして限界を訴える私に、男たちが座る権利をくれる。

今の私は、座るのにも男たちの許しがいるし、座り方も言われたとおりの姿勢しか許されない。

それでも、立っているのも辛い今の私にとってはありがたい。

指示通り、和式便器に座るようなポーズで座った私の尻穴は、そこで限界を迎える。ボールギャグ越しに間抜けな声を上げながら、尻の穴からローターを吐き出してしまうのだ。

「おっ、おおお…おっ、あああッ！フウ…フ…フ…ッ！ふへえええ、ふひひひひっ、おっ、おおおおッ！」

お尻から：ローター漏れて：ううう、こんないやああ…ごめんなさい、雄一、佐奈あ…お姉ちゃん、こんな格好でローターうんち漏らして…。

心の中で最愛の家族二人に懺悔するが、もうこうなるとローターを全部吐き出すまで許してもらえない。

早く次をひりだせ、となじられながらうんこをするみたい息まされる。
はじめはぽんぽんと、卵を生むように次々ローターが出てくるのだが、尻の奥に入りこんで
いるローターはなかなか出てこない。

私は必死に息を詰めて、顔を真赤にしながらローターを排泄しなければならぬ。

「フウー————、フウー————ッ、ふひい————ふひい————ッ！」

早く、早くしないと……。

そう思っただんばっても、時間切れ。

なかなかローターが出てこないことにじれた男たちは、私の髪を掴み立ち上がらせると、また腹パン責めを始める。

「おぶうううぐぐッ！！おごおおおッ！！あぶうううっ！！おごおおおおお
ッ！！」

ダメージが溜まっているところにまた腹パンを何回もされて、胃酸がおえっと上がってくる。

バイブが挿れられた下腹部を殴られると、体内でゴリッと嫌な音がする。

女を撻るための暴力、だがそれで私の身体が感じるのは快感だ。

「おほおおお————ッ！！おおっ、おっほおおん！」

目を見開いて吠え、犬のように涎を垂らしながら悶え、耐える。

「うひいひいー！ー！ー！ッ！ひいひいーっ、ふうううー！ー！ふううー！ー、むふううー！ー！ッ！！」

男に何度も殴られ、許してもらえたらまたうんこ座りで息む。

こんなことをされているのに、何故こんなにも気持ちがいいんだ。

腹部を襲う激痛から開放されるとき、感覚がたまらない。

単なる排泄快感とも違う、薬で感覚をおかしくされているせいだろう、痛くて苦しいのに気持ちがいいんだ。

ローターを全部出すまでこれの繰り返し。

お仕置きをされる度にローターの数が増えていて、全部出すまでの時間も増えてしまう。

それでも、今回は立たされて腹パンされるのは3セットですんだ。

だんだんと私のお尻が緩んできて、最初の頃より簡単に、卵を生むようにぽんぽんローターが出るようになっていた。

着実に調教、改造されていく自分の身体に恐ろしさを感じる。なによりも、こんな仕打ちで気持ちよく感じてしまうことが恐ろしい。

それでも、折れたらおしまい。心を強く持って耐えるんだ。

そう思っているが、今の自分のポーズは完全に男たちのペットか、良くて性奴隷。

お尻からローターを出し切って、膣穴のバイブも抜け落ちた。

*体験版はここまでです。続きは本編で。

ヒロインサイド（佐奈）連行）

ここはどこ？ どうして私は：佐奈はここにいるの？

思い出せるのは、買い物の帰り道まで。晩ごはんに悠にいの好きなものをたくさん作ろう！と張り切って家路を急いでいたことまでは覚えていた。

その後の記憶はない、気がついたら佐奈はこの部屋に閉じ込められていた。

捕まっただけに、お姉ちゃんと会うことができた。ずっと会いたいと思っていましたのですごく嬉しくてちよつと泣いてしまった。でもほとんど喋ることはできなくて、お姉ちゃんに言われたのは、助けが来るまで耐えること、絶対に命令されたことには逆らわないこと。あとはずっと泣きそうな顔で何度もごめんって謝っているだけだった。そうこうしているうちに、お姉ちゃんも引き剥がされてどこか別の所へ連れて行かれてしまった。

何度か部屋に入ってきた、お世話係らしき人に話を聞いてみても、どうしてこうなのかわからない、理解ができない。

これから佐奈がどうなるのかは教えてもらえたのだけれど、何がどうなっているのか全然わからないのだ。

お姉ちゃんがお父さんとの勝負に負けたから？ 負けた負債を支払う対象にお姉ちゃんと佐奈の二人が指定されていたから？

どういうことなのか、さっぱりだった。

とにかく私、高藤佐奈は何者かに攫われてしまったのは間違いない。ドラマやアニメで、親族の借金を取り立てに家に来る危ない人達のことを見たことはあるが、これはそんなレベルの危なさじゃあ無さそう。

お姉ちゃんとお父さん、身内が原因なのだとしたら、佐奈にも責任があるのかもしれない。でも、だからって拉致監禁まではしない。わかんないけど：普通しないよね？

教えてもらった負債の返し方も、全然普通じゃなさそうだった。

アダルトビデオみたいなの、エッチなことをさせられるのかと思ったのだけれど、なんだかそうじゃないみたい。あ、もちろん佐奈はそんなエッチなビデオ見たこと無いからわかんないんだけど：悠にいとほ、その：したことがあるから、そういうのはわかる。でもそうじゃないみたい。エッチなこととされるみたいだけど、佐奈に教えてくれた人が言うには、もっとひどい、拷問みたいなことをされて、泣き叫んでいるところを録画されて売られちゃうとか、実際に佐奈を虐めたい人がお金を払って虐めにくるとか、そんなことを言っていた。

女の子に拷問したいなんていう変態さんがそんなにいっぱいいるなんて信じられないんだけど：実際に拉致監禁されているので、嘘だとも思えない。

お世話係の人には、佐奈と同じ年くらいの子、ちよつと年上かな、可愛らしい女の子もいて、その人もここで無理やり働かされているみたいだった。ちよつとだけ話しを聞いたら、やっぱ

り佐奈が想像もできないようなひどいことを色々されているみたい。それでも、お世話係をやらされるような子は負債も少なくて、全然いい方だって言っていた。

録画：このままだと佐奈のエッチな姿とか撮られて世の中に出回っちゃうのかな：悠にいい見られちゃったらどうしよう：：。無理矢理AVデビューさせられた彼女なんて嫌だよね：：。悠にいいなら優しく抱きしめて、慰めてくれると思うけど、きつとすぐ傷つけちゃう。悠にいい以外に辱められるのはもちろん嫌だけど、何よりもそれで悠にいいが傷つくのが絶対に嫌だった。

だからといってどうしようもなく、監禁された部屋で身動きできずにいると、男の人が二人入ってきて、佐奈とお姉ちゃんの最初のショーが決まったと告げてきた。



最初にコップ一杯分くらいの飲み物を飲まされた。まずははないんだけど、変に甘ったるいなんだか不思議な味。その後、服を全部脱ぐように言われた。

それも男の人たちに見られながら。

部屋から出てくれないし、向こうを向いてもくれない。

そんなのいやだと言ったら、お前に拒否権はない、って言われて無理矢理脱がされそうにな

った。

「いやっ、やめてッ！！わかった、わかりました、脱ぎますからっ、自分で脱ぐからッいやぁ
あ離してッ！！」

そう言って必死に抵抗したけど、男の人には力じゃ勝てなくて、結局無理矢理脱がされた。
見ず知らずの男の人の前で全裸にされて、恥ずかし過ぎて、それ以上にすごく怖い。

おっぱいとあそこを手で隠していると、隠すなと命令される。

逆らったら何をされるかわからなくて、言われるがままに佐奈は自分から手をどけちゃっ
た。

佐奈の胸を見た時に、男の人はたいいて息を呑んだり、ニヤついたりする。みんなエッチな
目で見てるんだ。この人達だってそう。すごく恥ずかしくて、怖さよりも恥ずかしさが勝っ
てしまって、また手で覆い隠そうとしたら腕を掴んで止められた。

その人が言うには、もう佐奈には人権は無いらしい。命令に逆らうことは絶対に許されな
い、ってすごい迫力で脅された。

お姉ちゃんにも、絶対に逆らうなって言われていたけれど、こんなの耐えられない。

「うう：なんで、佐奈は人間だよ、道具じゃない！」

そう言ったら、男の人は思ってもみない言葉を帰してきた。

「お前はもう人間じゃない、家畜、もしくは俺たちに使われるただの道具だ」

どういうこと？ひどすぎるよ……。

その後本当に家畜みたいに首輪をつけられ、佐奈を引っ張るための鎖がつけられちゃった。そして手を頭の後ろで組まされて、足を少し広げさせられる。

まるで男の人を誘っているようなポーズで、エッチなところが丸見え。そしたらやっぱり、男の人二人が佐奈のおっぱいと股間に手を伸ばしてきた。

「いやっ、だめ：おっぱい揉まないで：！！ひっ、あそこ、触っちゃだめ、えっち、やだやだ、やめてよッ！！」

佐奈はまた男の人たちに逆らっちゃった。逆らうなと言われていたことなんて頭から吹き飛んでいたんだもん。

だって、身体を触られた瞬間、びくって電気が走ったみたいに強い刺激を感じてしまったんだ。

なんなのこれ：すごい気持ち良い……？

痛いような、痺れるような、でも残っているのは気持ちいい感覚。

やだ、お股がちよっと濡れてきちゃっている……。

うう：男の人にちよっと触られただけでこれじゃあ欲求不満な変態さんみたいだよ。

命令に逆らったから、殴られたりするだろうかとビクビクしていたけれど、男の人たちは大人しくやめてくれた。

「お前がいらないと言うなら良いだろう。せつかく少しは楽にしてやろうと親切にほぐしてやるつもりだったんだがな」

なんて言ってくる。どういうこと？女の子を裸にひん剥いておっぱいやお股を触るのが親切なんて、意味がわからない。

でも、佐奈はこの後それがすぐに本当だったことをわからされてしまったの。

次に男の人たちが取り出したのは、2つの大きなバイブがくつついたものだった。

貞操帯っていうんだっけ、お股に取り付けるような形のものに、バイブがくつついているそれを、佐奈の股間に取り付けようとしてくる。

佐奈が抵抗するのがわかっていたみたいで、後ろから羽交い締めにされて無理矢理おまんことお尻の穴にバイブを挿れられてしまう。

「いぎっ、ああ：：あああああ：：やめて、痛い痛い痛い：入らない、よお、そんなのおお」

おまんこの方は、なんとか半分くらいは入った。でもお尻の方は全然入らない。
当然だよ、こんな太いものが、佐奈のお尻に入るわけない。

悠にいとエッチなことをしている時には、そりゃあお尻も：挿れたことはあるけど、ゆっくりほぐされないと指を一本挿れるのだって痛いもの。

あっ、そうか、だからほぐすって：：そういうことだったんだ：。

と悠長に考えている時間もくれない。

男の人はどれだけ佐奈のお尻がきつくても、無理矢理押し込もうとしてくる。

佐奈が痛い痛いつて泣いてもお構いなし。

入るところまで何度も挿れて出してを繰り返されて、少しづつ少しづつ奥へとバイブが挿れられていく。最初はすごく痛かったのに、なぜか途中から気持ちよくなってきていた。お尻のバイブが全部挿れられる頃には、半分で止まっていたおまんこの方のバイブが一押しであっさり全部飲み込めてしまうくらい、佐奈のおまんこは濡れ濡れになってしまっていて……。こんなの変態さんだよ、佐奈の身体どうしちゃったの？

痛いの気持ちがいいなんて、こんなのおかしい。

「ううう：：もうやだよお、許してください：：お願いします」

そう泣きながらお願いしても無駄だった。

これを着ろ、と言われてスクール水着みたいな服と、長いグローブとソックスを渡された。言われたとおり着ようとするんだけど、足をあげるとウインと股間のバイブが動いて、着替えづらい。

ウインウインとおまんこお尻のバイブが出たり入ったりして、それがすごく気持ちいい。着替えの間だけでも身体が火照って、佐奈の顔、真っ赤になっちゃったと思う。

着替え終わったら、後をついてくるように言われた。部屋から出してもらえるみたい。

でもその前に、男の人に股間のバイブの仕組みを教えられて、信じられない気分になった。

佐奈に挿れられているバイブは、足の動きと連動して動かされるみたい。右足を動かすとおまんこのバイブが抜けてお尻のバイブが奥に押し込まれて、左足を動かすとその逆、おまんこのバイブが押し込まれてお尻のバイブが抜けるらしい。

それって、一歩歩くごとにおまんことお尻にバイブを出し入れされちゃうってことだよね……。

そんなの嫌だ、でも逆らったらもつとひどいことをされるかもしれない。

だって、人権はない、とか佐奈は道具だ、とか言ってくるような人たちだもん……悠にい……お兄ちゃん……助けてえ……。

佐奈が固まっていると、まるで犬の散歩みたいに、首輪に着いた鎖が引かれて無理矢理歩かされてしまう。

おまんことお尻をバイブでピストンされながら、佐奈は目的地まで歩くことになってしまった。



「ひいひい……お願い、もう許してください……歩くだけでイッチャウのおお、佐奈の身体おかしいよお、なんでこんなのが気持ちいいのおお、やだああ……」

延々と男の人にペットの犬みたいに引っ張られて歩かされて、佐奈はもうヘトヘトだった。目的の部屋は後少しらしいのだけれど、なかなか足が進まない。そうしていると、後ろからお尻を叩かれて、急かされる。

「あひいいいいっ！ ああああッ、ごめん、なさい：歩きます、歩きますからあ：：ケツッ：マンコッ：けつッ：まんこおッ！」

最初はただ歩かされるだけだったのに、ここまで来る間に佐奈を虐めるためのいろんなルールが追加されていた。

「ケツうう：っ、まんこおお：：っ、ケツうううう：っ、まんこおおお：：ッ」

これもその一つ。

最初は歩く度に「いちに、いちに」と言えと言うものだった。それも、今では押し込まれるバイブがどちらかを言いながら歩くのがルールになっていた。途中では、「前、後ろ」とか

「おまんこ、お尻」とかで許してくれていたけれど、今じゃあ「マンコ、ケツ」と卑猥な感じで言えと命令されている。

股間の穴の、バイブでピストンされている方を申告しながら歩かされるなんて、ほんとにひどい。

でも、それだけならまだマシな方なの。

さつきみたいに、歩くのが遅いとお尻を思い切り叩かれる。

これが、ほんとはすごく痛いはずなのに、どうしてか今の佐奈の身体は気持ちがいいって感じちゃう。

もちろん、まんことケツ、ああ：頭の中でまでこんな卑猥な言い方をしちゃう、佐奈変態さんじゃないのに：：。

でも、今の佐奈はほんとは変態みたいで、ケツを：お尻を叩かれるのが気持ちいいし、お尻の穴と、まんこ：あつまた言っちゃった、もうだめえ：：。

おまんこ、前の穴：性感帯をパイプで責められるのはもつとすごい、とろけそうなほど気持ちがいいの。

ここにたどり着くまで、本当に犬とかの、ペットみたいな感じで扱われて、佐奈の人権なんてなかった。

後ちよつとでゴール、角を曲がった先が目的地みたい。

「ケツううう：：ツ、まんこおおお：：、ケツうう：：うあ：：マ、マンコおお：：ひい
い：：」

後ちよつと、後数十歩なのに、もうだめ：頭が真っ白になりそう：：。

「ケツうう：：ツ、あ：：あああ：：ああ：：ツ、あああ：：：あひい
ッ！！」

*体験版はここまでです。続きは本編で。